

Ⅱ ボランティア活動報告

松本大学東日本大震災災害支援プロジェクト平成24年度活動報告 絆を育み、長期支援を！ ―被災地のニーズに添った復興支援―

尻無浜博幸、古林康江、松田千壽子

< 目次 >

1. 被災地のニーズに沿った支援
 - (1) 1年目の支援活動を振り返って
 - (2) 2年目の支援活動
 - (3) 継続するための問題点

2. 学習支援
 - (1) 学習支援の必要性
 - (2) 学習支援の実施状況
 - (3) 学習支援の効果
 - (4) 「大街道小学校学習支援日誌」より

3. 心のケア
 - (1) 活動内容
 - (2) 2年間の「心のケア」支援を振り返って

4. 松本大学サマーキャンプ
 - (1) 実施までの経過
 - (2) サマーキャンプの活動状況
 - (3) 地域の力、集結

5. 2年目の支援活動から見えてくる状況
 - (1) 被災地の現状
 - (2) 支援体制
 - (3) 変わりつつある被災地との係わり方

資料

- (1) 平成24年度活動報告
- (2) 平成24年度会計報告
- (3) 新聞掲載一覧

1. 被災地のニーズに沿った支援

平成 23 年 3 月 11 日(金)に起こった東日本大震災は、日本国民ばかりでなく、世界の人々をも、「何かしなくては」という衝動にかられる未曾有の被害をもたらした。松本大学の教職員、学生も災害発生直後から災害支援ボランティアグループ「松本大学東日本大震災災害支援プロジェクト」を学内に立ち上げ、支援活動の準備に取りかかった。実際に被災地に入り支援活動を開始したのは、現地の交通事情が少し落ち着きをみせてきた、4 月からであった。

また、支援に入る場所は、石巻市出身の教員が本学に在籍していて、現地の事情や情報が入りやすいということで、石巻市大街道小学校および同学区と決定した。以来本日まで、大街道小学校の支援活動は続いているのである。

(1) 1 年目の支援活動を振り返って

一年目の支援活動は、地元のニーズに応えるべく、考えられるあらゆる支援活動を実行してきたといえる。時間の経過にあわせて支援活動を変化させながら、継続すべき支援は継続し、情報発信もしながらの支援活動であった。

1) 小学校再開支援と瓦礫撤去・泥だし作業

23 年 4 月から 7 月までは、被災者の避難所となっていた大街道小学校の再開のための支援活動を最優先に、被災地の生活環境を整える手助けとして、その学区の瓦礫撤去作業を行った。

5 月には、より多くの学生がボランティア活動に参加できるように、また、少しでも瓦礫撤去等が進むように『One Day 弾丸ツアー』を実施した。これは、「前夜 8 時に松本大学を出発、バス内で一夜を過ごし、朝 7 時から夕方 4 時まで 7 時間瓦礫撤去・泥出し作業を行い、夜中零時に松本大学に戻る」というハードな計画（3 回実施）であったが、学生、教職員を合わせて 90 名以上が参加した。

2) 学習支援

瓦礫撤去や小学校の片付等を続ける中で、被災者からの要望に応えるかたちで、5 月から避難所の児童から中学生までを対象に学習支援を同小学校の教室で実施。避難地であった大街道小学校から被災者が仮設住宅等へ移った 7 月まで続けた。昼間は、瓦礫・泥の撤去作業、夕方から夜に掛けては学習支援という日々であった。

3) 心のケア

5 月から本学専門職員 2 名によるカウンセリングを開始、3 月まで月 1 回～2 回のペースで実施した。

4) 松本大学サマーキャンプ

現地で災害復興支援に参加している学生から自然発生的に生まれた、「被災した児童たちに、松本の美味しい空気を思いっきり吸わせてあげたい。美しい自然の中で思いっきり遊ばせてあげたい。」という思いを具体化したのが、サマーキャンプであった。浅間温泉組合の協力を得て温泉地に宿泊し、自然豊かな信州で過ごす 2 泊 3 日のキャンプで、内容は学生達が企画運営した。大街道小学校の児童達や保護者、教職員に喜ばれた企画であった。

5) 花いっぱい活動

学生達が泥かきや瓦礫撤去をおこなったお宅へ「復興ひまわりプロジェクト」として、ひまわりの種を届けた。この種は、松本大学近郊の休耕田を利用して学生達が育てたひまわりから取った種であった。8 月被災地から、ひまわりの花の写真と手紙が届いた。

また、平成 24 年 3 月には本学と交流のある台湾の福祉団体のメンバーと被災地へ花（松本市の高校から提供された 150 株）を届け、被災者、障がい者と本学の学生が協力して花壇作りを行った。

6) 松本大学 大学祭「梓乃森」祭での支援活動

10月には、大学祭に合わせて学生によるシンポジウム「～被災地と向き合うための Message～」や展示が行われた。シンポジウムでは、被災地大街道小学校の校長、被災地の精神科医、現地で活動を続けているボランティアの学生を招き、パネルディスカッションを行った。

また、本プロジェクトチームによる被災地物産―被災缶詰、石巻焼そば、石巻かまぼこ、さんまーの販売を実施した。売上は、大学祭の模擬店の売上と合わせて災害復興支援活動へ寄付された。

7) その他

- ・生活物資の支援も実施した。ただ闇雲に物資を送るのではなく、学生が仮設住宅へ移り住むことになった家族に聞き取り調査をしながら、必要としている物資を長野県内から集めて、被災家族別に整えて、各々の家族へ届けたのである。

- ・「心のケア」支援で5月から3月まで石巻へ通った2名のカウンセラーの呼びかけにより「心の支援」研修会が平成24年3月25日松本大学で開かれた。大学祭に来ていただいた被災地の宮城クリニック院長宮城秀晃先生を再び招き、医療・教育・福祉・心理関係の専門家、行政関係者や学生達と、震災時の心理状況やその時々求められる支援についてシンポジウム形式で話し合いを行った。昼食の時間には、本学尻無浜ゼミの学生による本プロジェクトの活動報告を行った。

- ・同じ3月に本学の地域づくり考房『ゆめ』で活動する学生達が中心となり、「忘れない！ 3・11～今、私たちにできることは～」のテーマで、高校生や大学生、本学卒業生たちに働きかけて、このテーマについてワークショップを開き、災害時のこころ構えや対応などを話し合った。

以上、これらのボランティア活動を支えるために、本学の山根教授とゼミ生が「フラ・イズ・アロハ チャリティーコンサート」を開催したり、プロジェクトのメンバーが災害支援補助金募集に応募したり、学長自ら地域の各種団体や企業に声をかけ、一般市民、本学の学生・教職員などに寄付を募った。教職員あげて、あらゆる手を尽くしながら関係各位の協力を得て実施してきたのである。

(2)2年目の支援活動

松本大学東日本大震災災害支援プロジェクトのコンセプトは、「松本大学の教育理念（地域貢献）に則り、日頃の教育活動で培った地域との関係づくりを活かした支援」ということで、一つの地域で信頼関係を築きながら学生と共に支援活動を行い、更に教育機関としての持ち味を活かした「息の長い支援活動」を通して最終的には「松本大学モデル」を作っていくことにある。

自己満足に陥ることを諷めながら、被災地や被災者のニーズに添った活動を常に心掛けて支援活動を続けてきた結果、平成23年度の支援活動終盤に、大街道小学校の校長先生より、24年度も支援活動を続けて欲しいとの申し出があった。支援継続にはいろいろと解決しなければならない問題があったが、プロジェクトの立ち上げ当初のコンセプトからして「否」はなかった。

大街道小学校の校長先生と相談の上、平成24年度は支援内容を絞り込んで、支援活動を継続することになった。支援内容は次の3点とした。

1) 心のケア

本学スクールカウンセラーによる児童、保護者、教職員に対するカウンセリング（継続）。同じカウンセラーが継続して相談に応じていることにより、信頼され、頼りにされるようになっていた。

2) 児童の学習支援

平成23年5月～7月まで避難所であった大街道小学校にて実施し、被災者が仮設住宅へ移られた時点で中止していた活動であるが、今回この活動を大街道小学生を対象に復活することになった。

3) 松本大学サマーキャンプ

今年も是非開催して欲しいとの大街道小学校の皆さんからの要望を受けて実施することが決定。

残念な点は、大街道小学校および小学校区への復興支援と合わせて、昨年度からの課題となっていた、産業復興をどう支えるかについて、松本市や近隣の市町村の企業の聞き取り調査や被災地の情報収集等をおこなってきたが、具体的な方向性を見付けられないままとなっていることである。

(3) 継続するための問題点

1) 活動資金の調達

支援を継続するためには、活動資金の調達が一番の問題であった。大学は学生の学納金で運営されている。この学納金は松本大学の学生を教育するためのものである。したがって、災害支援活動の資金は、別途調達しなければならない。一年目は、いろいろな企業や団体などの大震災復興支援事業補助金を用意されていたが、2年目ともなるとかなり補助金が減少していた。また、企業や団体、個人からの寄付に頼るにも限界があった。しかも、松本市から石巻市まではJRを乗り継ぎ、バスで行かなければならないため、交通費がかかるのである。学生に毎回交通費を負担させるのはどうも無理な話である。いくら支援活動を続けたくとも活動資金がなければ、学生との援助活動もあきらめるしかないのである。

そんな折、文部科学省初等中等教育局の「緊急スクールカウンセラー等派遣事業」の情報を探しだした。文部科学省の担当者に「1週間切っていますが大丈夫ですか」と心配されたが何とか申請書類を整え応募、採択されたのであった。これにより、心のケア支援活動と学習支援活動の資金を確保することができた。

サマーキャンプの資金の目処がついたのは7月に入ってからであった。公益財団法人JKAの「平成24年度（復興支援）被災者に対する生活支援活動事業補助事業」として認められ、約300万円の補助金が受けられることになったのである。

また、「第2回チャリティーラブイズアロハ」を山根宏文教授と山根ゼミが企画、昨年に続き活動資金として寄付していただいた。

以上に23年度の活動資金の残金を合わせて、平成24年度も無事、支援活動を継続することができたのであった。（資料「会計報告」参照）

2) 現地での活動拠点の確保

支援活動一年目は、前半7月までは大街道小学校の会議室を松本大学のメンバー（教職員と学生）の宿泊兼活動拠点として利用させていただいた。小学校の機能が復活した9月からは全員ホテルに宿泊して支援活動を実施してきた。24年度も支援活動を継続することが決定した段階で、活動拠点兼宿泊場所を確保することを検討し、小学校の近くにアパートを借りることにした。これにより、宿泊にかかる経費が大幅に削減されることになった。

アパートには、8組の寝具と簡単な生活用品を準備し、そこで食事をしたり、風呂に入れるように整えた。ボランティア参加者は、自分の必要な持ち物以外に、シーツ2枚と枕カバーとなるタオルを必ず持参することを申し合わせ、アパートの共同使用に備えた。

3) 学生・教職員への対応

学習支援およびカウンセリングは大街道小学校にて行う事になっているため、学生および教職員は授業や仕事を休むことになる。

1回の活動スケジュールは、早朝7時頃松本を出発、13時頃に石巻到着。14時～16時まで学習支援、あるいはカウンセリング。次の日学生達は午前中、小学校から依頼された作業を行い、13時～16時まで学習支援。カウンセラーは8時30分～16時まで相談や授業参観などを行い、昼食は小学生と一緒にとる。そして、全員16時30分には石巻を発ち、零時過ぎに松本駅に到着という1泊3日のハードスケジュールである。

教職を取っている学生は、実習としてこの活動を認めてもらえることになったが、その他の学生への対応は、授業担当教員に委ねられた。ボランティア活動に参加した証明書は、昨年同様プロジェクトから発行したが、科目によっては欠席扱いとなるケースもあるので、その点を十分理解した

上で、ボランティア活動に参加するよう学生に説明した。

教職員は、有休扱いである。これらの点の改善を検討（例えば、出張扱いなど）したが、良い案がなく、基本的にボランティア活動であることから1年目と同じ状況（有休扱い）で実施することを教職員は了解した。

2. 学習支援

(1) 学習支援の必要性

震災後一年が経過、家庭環境の変化にともない子供達に様々な影響が出始めた。その一つに、仮設住宅で生活する児童の学力低下問題である。しばらくは、大街道小学校の教員達が交代で放課後、児童達の勉強をみるなどの対策を講じたが、放課後残って先生と学習するという行為が児童達の間では「居残り感」を強くして、効果が上がらなかったとのことである。このような経過をたどり、次ぎに考えられた方法が、年齢の近い学生と一緒に勉強するスタイルはどうであろうかということで、震災以来大街道小学校へ出入りしている松本大学の学生に白羽の矢がたったのである。

方法は、「週に2日間だけではあるが、松本大学のお兄さん、お姉さんと放課後勉強をする。勉強は、基本的に宿題を行う。宿題が早く終わった時は、お姉さんやお兄さんと一緒に楽しい時間を過ごす。」というものであった。

学校側の目的としては、帰宅後、自宅で勉強することを習慣付けることであるが、まずは、放課後宿題を済ませて帰宅することからスタートしたわけである。

(2) 学習支援の実施状況

学生達は、月に2回（1回2日）のペースで大街道小学校へ通い、放課後児童達の宿題や自主学習の相手をしてきた。

訪問回数 22回（44日） 参加学生数延べ 145名 参加児童数延べ 2034名
 （内訳：1年生 236名 2年生 325名 3年生 415名 4年生 420名 5年生 259名
 6年生 379名 合計 2034名）

教室は2教室で、1年生～3年生が学習する教室と、4年生～6年生の教室と二手に分かれて、学習指導に当たってきた。

学習支援に参加した学生達は必ず被災地の現状を視察し、児童達が置かれている現実を少しでも肌で感じた上で 学習支援をするように心掛けてきた。

学生達の学習支援実施報告書によると、色々な体験や工夫をしたようである。特に、低学年の児童の扱いには苦戦したようで、次の支援担当者への引き継ぎ事項に詳細な情報提供をしているケースが多かった。児童個人個人の名前を挙げて引き継ぎをしているところを見ると、学生たちがきめ細やかな対応をしていることが伺える。学生達にとっても貴重な経験になったようである。

また、児童の保護者から直接お礼を言われたとの報告が学生からあった。仮設住宅で落ち着いて学習ができずに学力の低下がみられる児童の保護者からも、感謝のことばが学校へ寄せられているとのことであった。学校側から本活動が石巻での学習支援のモデルとなっているとのことのお話も伺った。

1年生～3年生の教室（算数ひろば）

4年生～6年生の教室（和室）



(3) 学習支援の効果

学習支援は、5月から初めて1年が経とうとしている。しかし、学習支援としては未だ道半ばとといったところで、この段階で学習支援の効果を語ることは難しい。参加している児童の学力が突然アップしたという訳にはいかない。また、アンケートを採って保護者や教職員から意見を聞くには、もう少し実績が必要であろう。

そこで、学習支援を通して気づいた点を上げておく。

- ①放課後の勉強会に参加する児童が固定かしつつある。この点は、良いのか悪いのか現時点では判断が難しい。しかし、必ず参加する児童がいるということは、評価に値すると考える。
- ②木曜日・金曜日の放課後、松本大学のお兄さんやお姉さんが来ている時は、勉強してから帰宅するという習慣が身につけてきている。これは、自宅学習の習慣付けのアプローチができつつあるのではないかと考えられる。
- ③松本大学から学習支援に行く学生達は、授業の関係（授業をあまり休めない）もあり、メンバーの入れ替わりがかなりある。しかし、児童達は、個々のメンバーが替わっても、松本から来てくれるお兄さん、お姉さんという捉え方をしており、メンバーの入れ替わりは問題とならないようである。

一方、本学の学生達も、互いに情報交換を行い、いろいろと話し合い工夫を重ねている。驚くほどの進化を遂げているようである。

- ① 児童への対応の仕方
- ②学習支援の進め方の工夫
- ③次ぎにくるメンバーへの引き継ぎ方
- ④大街道小学校の教職員への対応

どちらかと言えば、本学の学生達への教育効果の方が大きいのではないかと考えられる。支援活動というよりは、フィフティーフィフティーの関係となっているようである。

(4)「大街道小学校学習支援日誌」より

学生達が学習支援に行くたびに記載していた「大街道小学校学習支援日誌」の中から、学生達の学習支援の様子を伺い知ることができる。ここに、一端を紹介したい。

1) 学習支援スタート (5/10,11)

- ・児童に頼られて、やりがいを感じた。
- ・場の雰囲気呑まれそうになり、「先生」としての立ち位置に戸惑った。
- ・騒がしい子に対してどのように注意して良いのかわからなくて戸惑ってしまった。
- ・一日目で知り合いになったので、二日目はやりやすかった。逆に、二日目に初めて参加した児童との差を付けないようにと心がけられた。

2) 何回か学習支援を続けているうちに、問題点も表面化してきたようである。

- ・低学年の児童達は、宿題が終わるのが早くて、遊びがメインっぽくなった。
- ・終了時間になっても、遊びたがってなかなか帰宅しようとしなない。終了時間を守らない。
- ・お友達が宿題を終えると自分が終わっていても一緒に帰ってしまう。
- ・宿題が終わった子が騒ぎ、勉強している子の邪魔をする。勉強している子が集中できない。
- ・児童と親しくなりすぎて、注意しづらくなってしまった。注意すべき事は、きちんと注意する。
- ・けんかをどうやってとめるか。
- ・6年生の問題にはレベルの高い問題があるのでその対応をする。

3) 2ヶ月が経過すると、名前をあげて注意事項や伝達事項が書かれるようになり、学生達がより親身に、児童の対応にあたっていることが伺える。また、問題点の改善策も提案されている。

- ・5年生の〇〇君と6年生の〇〇君と、コミュニケーションが苦手みたいなので対応を考える。
- ・4年生の〇〇君が何時もうるさくて、それを注意する女の子の〇〇さんは手がでる。
- ・4年生の〇〇君と〇〇君の2名の関係を注意して見て欲しい。

- ・カウントダウンや具体的なゴールを提示してあげると、子供達も積極的に勉強をやってくれる。
 - ・初めに、今日は何をするのか、目標（勉強する内容と範囲）を確認してから勉強させるようにした方がお互いにとって良いと思う。
 - ・チョークや子供が遊んでしまいそうな物は片づけた方が良い。
 - ・児童の話に耳を傾けることで、スムーズに宿題をさせることができる。
 - ・席の並び替えや教室変更（和室でない教室の方が良い）の提案。
 - ・宿題が早く終わった児童のために、プリント（問題）や折り紙、ぬり絵などを用意しておいた方が良いと思う。
 - ・大学生と遊びたい子が騒ぐので、校庭で児童と遊ぶ担当を作った方が良いと思う。
 - ・「学習支援日誌」を熟読すること。
- 4) 最終日には、大街道小学校の児童から、お礼の手紙を受け取った学生や、保護者から直接お礼を言われた学生もあり、学生にとっては良い経験となったようである。
- ・5年生の女の子の母親から「いつもありがとうございます。お世話になってます。これからもよろしく願います。」とお礼を言われた。
 - ・勉強をしにくるというより、松本大学生と話したり、遊んだりしたいという子が多かった。
 - ・11月で学習支援は終わってしまうが、その後もこの活動は続けた方が良いと思う。（このような意見が学生の中に多く、結局2月まで延長して学習支援を実施した。）
 - ・きちんと伝えるということは、自分たちの将来に必要なスキルなので、このような体験をより多く経験することが自分のためになると感じた。

3. 心のケア

本学の実施しているカウンセリングは平成23年5月にカウンセリング開始当初より常に同じカウンセラーが担当しており、被災地の皆さんから厚い信頼を寄せられている。

平成24年度2年目のカウンセリングは、保護者・児童は勿論、教職員のニーズの高まりに合わせ、更に児童・生徒・保護者・教職員のこころに寄り添う支援の実践と研究を中心に据え、引き続き松本大学健康安全センター臨床心理士が専門に関わりを持つことでスタートした。

4月当初より1年間の日程を組み月1回の訪問計画の下で行うこととした。

2年目2本の『絆の木』に成長！

『しりとり』をしよう！



【カウンセリングと次の学習支援活動は、文部科学省「平成24年度緊急スクールカウンセラー等派遣事業」として実施することができました。】

2年目に入り児童のPTSDへの移行も考慮し、個別相談を中心に位置付けて計画した。計画については石巻市立大街道小学校教校長先生・教頭先生・養護教諭と連携し、毎回の相談や啓蒙活動の予定を立て以下、遂行した。

(1)活動内容

- ①児童・保護者面接
- ②各クラス授業参観及び観察
- ③第2回児童・保護者アンケート調査
- ④教職員アンケート：臨床心理士としてできる後方支援のあり方の研究と実践
- ⑤サマーキャンプ付き添い・相談
- ⑥『絆の木』2本目制作
- ⑦絆は消えない『子ども達の心を守るためにもう一度』のリーフレット作成し全家庭に配布又、石巻市教育委員会へも持参し市内への啓蒙をお願いした。

24年度は年間で11回(22日)訪問した。電話・メールによる相談は12件であった。年間通しての相談件数は、児童の相談が26件、教職員48件、保護者38件。その他、コンサルテーション、授業参観、アンケートに関するアドバイス、資料提供などを実施してきた。同行した学生達による心の支援活動も13回実施した。

1) 主な相談内容と主訴

終りのわからない余震への不安・集中力の低下・PTSD様症状の出現・落ち着かない・乱暴・家族みんなが落ち着かない・不登校・食への興味の低下。家庭訪問(避難所訪問)の要望はなかった。

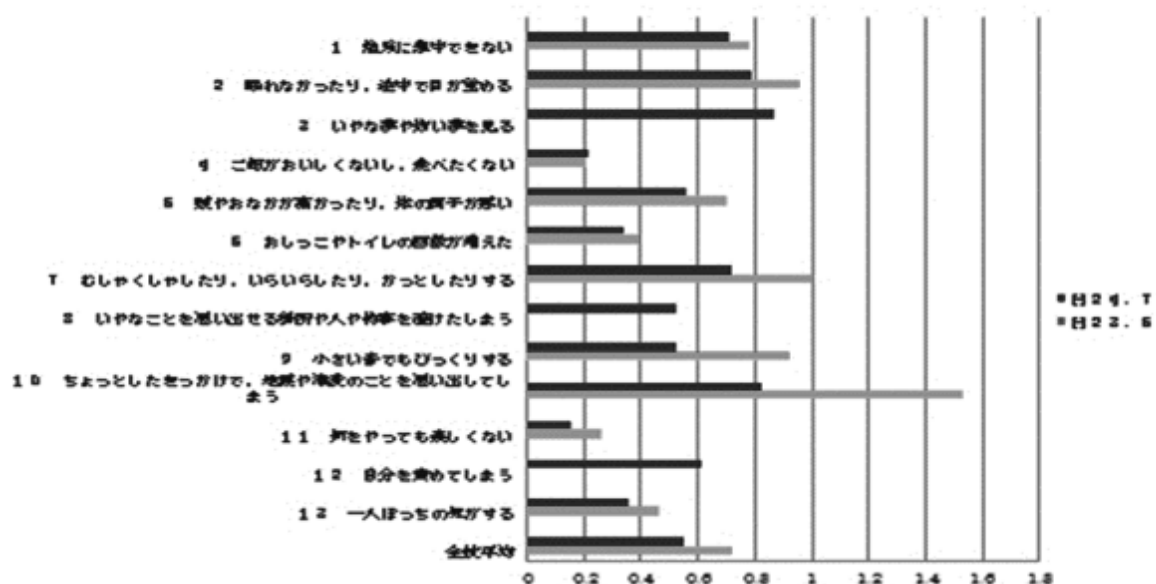
2) 月別相談件数：

24年度相談件数～大街道小学校訪問11回(22日) ⇒258件 サマーキャンプ1回(3日)⇒合計25日
電話・メール相談～12回⇒合計30件 **総合計288件**

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
回数	1回	1回	1回	1回	1回	1回	1回	1回	1回	1回	1回	1回	12回 (25日)
児童相談	0	0	1	1	8	3	3	3	2	1	1	3	26
教員相談	8	5	3	3	2	2	7	2	2	3	6	5	48
保護者相談	0	5	3	2	1	3	7	4	1	2	5	5	38
コンサルテーション	14	6	4	3	0	5	6	9	4	8	6	8	73
授業参観	4	2	5	3	0	5	2	3	3	3	2	2	19
リラクゼーション(G.C)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
アンケートに関する相談	1	0	0	1	0	6	1	0	0	1	1	0	11
資料提供	0	0	1	2	0	2	1	0	4	0	2	2	14
学生による心の支援	2	2	2	2	3	2	0	0	0	0	0	0	13
避難所・仮設訪問	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	29	20	19	17	14	28	27	21	16	18	23	26	258

3) 児童・保護者2回のアンケート結果集計

23年・24年全校(こころとからだのアンケート)



結果は23年度：8.2%（1年目阪神淡路大震災9%）、24年度：5.4%だった。

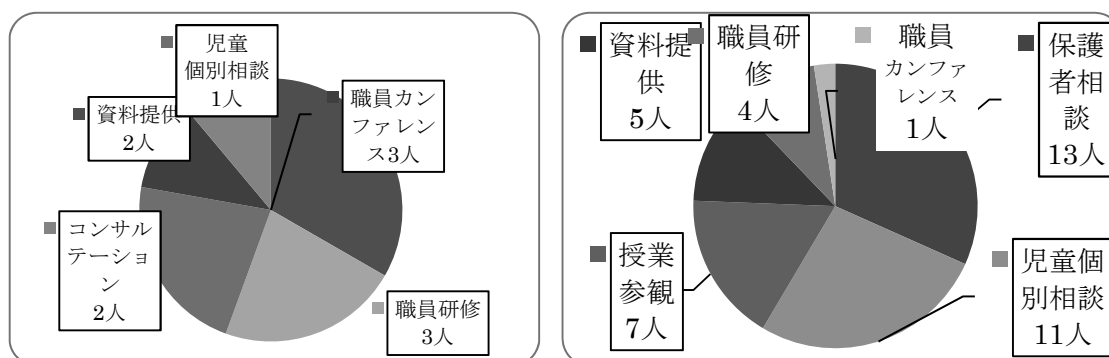
『震災PTSD可能性5%』松本大学臨床心理士2年間の児童アンケートをまとめた。

—信濃毎日新聞記事 24. 12. 7より抜粋—

4) 教職員アンケートの結果

- ①遠方からの支援であったが概ね好意的に受け入れて頂けたことが分かった。
- ②訪問回数は月2回以上の希望が多く、現場では継続しての更なる心のケアを必要としている。
- ③学生による支援では、子どもたちと大学生との交流も好評であった。
- ④大学を挙げてのサマーキャンプなどが信頼を得るのに非常に役立った。
- ⑤自由記述からは、遠方からのハンデは少ないとの意見があった。逆に遠方であるというメリットもあり、被災地の近くにはいなくとも心の支援は行えるのだということが分かった。被災地にいると不安が掻き立てられるが、遠方から支援に入ることによって陸続きの地に安全な場所があると感じられそれが安心感につながるようであった。

全体的に見てカウンセリングを中心に、大学や大学生との交流も大切にできたことは、地域と地域との交流にもなり、学校を中心に地域全体をも支援していくことができたと考える。しかし、やはり遠方支援のデメリットもあり、内容をみると改善が難しい部分であると思われた。



5) 学習支援開始『カウンセリング等心のケアにも貢献』

「私立松本大（長野県松本市）の学習支援活動が石巻市大街道小（佐藤文昭校長、児童 320 人）で行われている。5 月からほぼ 1 週間に 1 回のペースで同小を訪れ、約 100 人に勉強や宿題を教える一方、カウンセリングなど心のケアにも貢献。保護者から感謝の言葉が寄せられている。

メンバーは毎回、教職員と活動支援を希望する学生の 5、6 人で編成。木、金曜日の午後 2 時すぎから約 2 時間、算数や国語、学年ごとに出された宿題などの指導をしている。「継続的な支援が必要」と、学校近くにアパートを借りての支援活動。

7 日は同大健康安全センターカウンセラーで臨床心理士の古林康江さんが学生 5 人とともに訪問。学生が 1～3 年担当と 4～6 年担当に分かれ、勉強を教えた。算数の宿題を教えてもらった 2 年の女子は「分かりやすかった」と笑顔だった。

古林さんは「月日の経過とともに子どもたちの表情が明るくなり、勉強に取り組む姿勢も前向きになってきた」と心の変化について説明。相談事も現実感のあるものになってきたという。」

三陸河北新報社記事： 24. 6. 7～8 より

6) 『子ども達の心を守るためにもう一度』のリーフレット作成

大街道小学校の 4 学年主任及川教諭・佐藤養護教諭に協力頂き全家庭用お便りを制作。

「絆は消えない」の見出しで、松本大学臨床心理士が信州から続く被災地支援として 2 年間月 1 回訪問で親子の心を支援続けた。

信濃毎日新聞：25. 3. 11 より

7) 1 年目に引き続き絆の木は 2 本に成長！～まだまだ続く絆の木！



《授業参観後『笑点大切り』出演児童に囲まれて！》



《全家庭へお便り配布》

大街道小学校全校配布&教育委員会へ持参

子どもたちの心を守るためにもう一度！

＊絆＊

～家庭・学校・地域から～



《子どもの心を守るために大切なこと》

☆キーワード☆ 絆・安全・安心感・信頼感

1. 家庭から：一家団らの時間を作る・食卓を囲む・一緒に遊ぶ
2. 学校から：友だちや先生と元気に遊ぶ
3. 地域から：笑顔であいさつ・助け合いの気持ち
4. 子どもたちの『できる』を信じる！

松本大学 カウンセラー 古林 康江
大街道小学校 養護教諭 神村優希子

(2)2年間の「心のケア」支援を振り返って

1) ポイント支援

以下は今後も継続的に見守りが大切な子供達である。

- ① ハイリスク要因（人的、物的被害の大きかった）の子供達
- ② 発達の偏りを抱えた子供達（家族も含めた支援が必要）
- ③ 厳しい家庭環境にある子供達・保護者
- ④ 大津波により行方不明者（雅俗・友人・親類等身近な人）がいる子供達
- ⑤ 震災後の生活環境の急変による家族関係の危機にさらされている子供達・保護者
生活環境の急変として上がられる状況は
 - a. 家族が離れ離れの生活を余儀なくされている。
 - b. 仮設住宅での生活によるストレス。2次的な問題が出始めている。
 - c. 被災の程度の差とその後の生活状況の差
 - d. 離婚の増加・震災以前から不安定な夫婦関係

2) 今後の課題

- ①心のケア 上記1)の①～⑤の子供への重点的カウンセリング
- ②校内での相談継続を必要としている子供へのバックアップ
- ③ アンケート調査の実施結果により、数値の高かった子供達への支援体制
- ④ 地域ぐるみの予防を呼びかける
- ⑤ 3年目も続く余震の恐怖に対する対応
- ⑥噂や情報による不安の払拭等の対策
- ⑥ 時系列対応の見直し

子どもたちにとって厳しい生活環境は今後も続いていく。こころの問題を持たせないよう「地域まるごとの予防策を考える」必要がある。

3) 2年間活動を通して

2年間の活動を通じて『被災された方々の気持ちにより添う』ということの重みを実感している。児童・保護者・教職員に教えてもらったことは、同じスタッフによる長期的な関わりの重要さである。今回の活動の重要なキーワード「絆」、「忘れない」、「行動する」、「継続」であると感じている。

特に、5ヶ月目頃からお互いに信頼関係が深く感じられ、和やかでスムーズな相談活動の展開が広がってきたと思われる。

最後にこの活動・研究を通し、沢山の方々に協力・応援していただき、人と人との繋がり「絆」の大切さを教えていただいた。大街道小学校の関係者の方々、松本大学教職員、学生（度重なる休日補講）、地域の皆様（カウンセリングの日程変更）にも協力応援いただき感謝の気持ちで一杯である。

4. 松本大学サマーキャンプ

昨年度のサマーキャンプは、ともかく被災地の子供達に自然の中で大いに遊び、温泉で体をほぐし、心身ともにリフレッシュしてもらいたいという思いで、1年生～6年生まで全学年を対象として希望者を募り、松本市のアルプス公園と松本大学を会場に実施した。

今年度はサマーキャンプの企画は学生スタッフが行い、教職員はサポートにまわり、「心のケア」と体験学習を念頭に計画を立て、学生が中心になり運営した。昨年との違いは、保護者の参加希望者が少ないとのことで、3年生以上を対象とした計画にした。

大街道小学校からは、3年～6年の児童95名、保護者6名、教職員5名、付き添い看護師2名の合計108名が松本大学サマーキャンプに参加した。

(1)実施までの経過

平成 24 年のサマーキャンプは、問題多発で、ぎりぎりまで実施できるか否か危ぶまれた。7 月 5 日付けにて、財団法人 JKA の平成 24 年度東日本大震災復興支援補助事業に採択され活動資金の目処がつき、やっと実施に踏み切った。早速大街道小学校との打合せに入ると同時に、バスの確保、宿の確保に取りかかったが、24 年は長野県が全国高等学校総合体育大会の開催県となっており、バスの確保も、宿の確保も艱難をきわめた。結局、バスは、本学独自で確保することを断念して、卒業生のいる旅行会社へ依頼する事にした。また、宿も昨年同様の条件で、浅間温泉組合へ 130 名宿泊できるようにキャンセル待ちの状況で依頼した。ある意味で、見切り発車で動き出したサマーキャンプであった。

7 月 9 日より学生スタッフの募集を開始。7 月 12 日～20 日に学生によるサマーキャンプの企画検討がなされ、しおり作成や学生の組織が成立した。

【学生の組織】

- ①送迎班：送迎バス内でのプログラム作成と送迎を担当する。バスの中でのプログラムを企画運営する。前日に石巻へ迎えに行き、最終日には児童達と一緒に石巻まで同乗して行く。
- ②グループリーダー（生活班）：2泊3日のホテル（浅間温泉での活動）での児童の世話をする係。一人で1～2部屋の児童約7名の面倒をみる。健康状態のチェック、食事の進み具合、忘れ物や無くし物の世話まで行う。児童達は、生活班の学生と部屋毎にまとまって宿泊先以外の温泉へ入りに行ったり、縁日へ行ったりと7日の昼間のプログラム（A・B・Cコース）以外は、いつも生活班の学生が児童と一緒に行動する。
- ③プログラムリーダー：2日目の体験学習と見学などプログラムの作成と運営をおこなう。A、B、Cの3コースに分かれて、担当の教員や地域の皆さんと協力してプログラムを進める。
- ④ミニ縁日班：浅間温泉の皆さんと協力して、縁日の準備と運営を担当。最後の花火の準備も行う。

7 月 17 日にサマーキャンプ参加者名簿が大街道小学校より届き、19 日には大街道小学校参加教員名簿が届いた。これを受けて、7 月 23 日に参加児童へしおりや健康チェックシートなどを送付。7 月 24 日～8 月 4 日には、各コース別に準備が進められた。7 月 26 日学生プログラムリーダー打合せ 7 月 27 日グループリーダー（生活班・学生）打合せ。8 月 3 日合同の最終打合せが行われた。8 月 5 日送迎班が石巻に向けて JR にて出発。いよいよ松本大学サマーキャンプがスタートしたのである。

(2)サマーキャンプの活動状況

・前日の 8 月 5 日、送迎バス内のプログラム担当の学生 11 名と教職員 2 名が石巻まで迎えに行く。JR 東北新幹線の中でも翌日のバス内で実施するプログラムの確認をしている学生達であった。

・8/6 6 時 30 分石巻大街道小学校集合。児童達は、健康チェックを済ませてから決められたバスに乗り込む。7 時出発

の片道約 9 時間の長いバスの旅。バスの中では、児童達が退屈しないように、バス担当の学生達が色々なクイズや DVD などを用意。そして、松本市や安曇野市の照会、明日のコースの説明など楽しい雰囲気を出していた。



・途中高速道路にて事故渋滞にあい、2時間遅れの18時ごろに浅間温泉到着。一時間程休んで、19時に皆そろって夕食。いよいよサマーキャンプのスタート。今夜は温泉に入ってゆっくり休み、明日に備える。



・8/7 サマーキャンプ 2日目

9時、各々のバスに乗って各コースの会場へ移動し、体験学習の開始。

・Aコースの活動内容 —松本城下町ラリー「城下町のナゾをとときあかせ！」—

活動場所：松本市街地（松本城・松本城周辺 松本市大正ロマンの街土上）

松本大学の学生が作ったクイズやミニゲームをしながら松本城や城下町を探索し、城下町の体験学習を行った。大正ロマンの街では地域の皆さんとそうめん流しを体験。午後は、市内を流れる女鳥羽川で水辺の学習会を実施した。



湧き水の多い松本市街を謎解きしながら散策、松本城も登り、城下町について松本大学のお兄さん、お姉さんから説明を聞いた。湧き水を味わったり、湧き水を使った素麺流しや、川辺で遊んだり、松本の誇る水にも十分親しんだ。

・Bコースの活動内容 —自然体験コース「夏の暑さをふきとばせ！」—

梓川川遊び、鱒の掴み取り、野菜の収穫、バーベキュー、心も体もリフレッシュ!

活動場所：上高地の下流域（松本市梓川 梓水苑）

松本を流れる梓川で松本の自然を思いっきり体感することを目的としたコースである。児童は水着に着替えて川遊び、虹鱒の掴み取り、野菜収穫体験。お昼は取った虹鱒と収穫した野菜を使って、児童たちが学生に手伝ってもらいながら、自らの力でバーベキューの準備。



野菜の収穫は、農家の皆さんから指導を受けて実施。虹鱒の掴み取りは、虹鱒を放す池作りから皆で協力して行い、完成後、魚を放して掴み取り。バーベキューの火おこしも、食材の準備も大変。信州の自然の中で、大学生を相手に思いっきり楽しい時間を過ごした。

・Cコースの活動内容 一安曇野・八面大王コース「八面大王に会いに行こう！」一
野菜の収穫体験、蕎麦打ち・おやき作り・虹鱒串刺し体験。

活動場所：安曇野平（安曇野市周辺）

松本名物の蕎麦打ち体験、おやきづくり体験、虹鱒の串打ち体験・塩焼き体験、畑での野菜収穫体験、それらを使って天ぷら揚げ体験、地域の方や学生に指導してもらい、地産地消の食事など初めての体験ばかりであった。午後は八面大王の足湯へつかり、大王わさび畑の見学も実施。



地域の皆さんの協力の下、松本大学のお兄さん、お姉さんと一緒に、おやきを作ったり、蕎麦打ちを行ったり、一番大変なことは虹鱒に串を刺す作業。一緒に参加された保護者も日頃見せない子供たちの積極的な姿にびっくり。嬉しい驚きと感想を寄せてくれた。

・8/7夜 浅間温泉ミニ縁日

最後の夜は、夕食を済ませ、浅間温泉の皆さんが用意したミニ縁日へ全員で参加した。浅間温泉内の広場の簡易ステージで、地元の皆さんの演奏会や蕎麦音頭を楽しんだ後、皆で踊りの指導を受けて、全員で蕎麦音頭を踊った。ビンゴ、射的にスイカ割り、松本大学天文学部のお兄さんが望遠鏡で見せてくれた土星の輪に歓声。屋台（ご当地B級グルメ山賊焼、焼き鳥、かき氷、スイカ食べ放題）も出てお祭り気分。地元の小学生や浅間温泉のお客さんも加わって、皆一緒に楽しい一時。終了予定時間を一時間もオーバーして、最後は花火で閉めたのである。



・8/8 お別れの会

朝、浅間温泉の皆さんとお別れ会。松本手まりの携帯ストラップのお土産を頂き、別れを惜しんだ後、松本大学へ。松本大学でも、3日間一緒に過ごした、お兄さんやお姉さんとお別れの会。最後に、集合写真を撮って、「来年もサマーキャンプに参加して、お兄さんお姉さんに会いに来る」と約束を交わす児童たち。



6年生は、中学生になってもサマーキャンプに参加させて欲しいと学生達に訴えていた。別れを惜しみながら、10時には、松本大学を出発、帰路についた。



帰りのバスのなかでは、思い出を話し合ったり、ビデオを見たりと元気一杯。学生の工夫のお陰で、来る時も帰る時も大きなトラブルもなく、皆無事に夜7時には大街道小学校に到着し、お土

産を手を迎えに来ていた家族と帰路についた。バスで同行した送迎班の学生達は、石巻に一泊して翌日全員無事に松本に到着した。

(3) 地域の力、集結

今回のサマーキャンプは、松本市と安曇野市の地域の皆さんの力を借りて実施することができた。本学のコンセプト「地域まるごとキャンパス」の延長線上で実現できた企画であったと実感している。学生の企画を地位の皆さんが全面的にバックアップ、学生と共に運営にも携わっていただき、地域の力を集結した体験学習型サマーキャンプとなった。

資金面では、浅間温泉共同組合、本郷鶏肉店他一般市民の皆様や松本大学関係者、フラダンス愛好家の皆様の寄付金、公益財団法人JKA「平成24年度（復興支援）被災者に対する生活支援活動補助事業」の補助金、松本大学山根ゼミ「チャリティー・アロハ・コンサート」からの寄付金等を充当することで実施することができた。

また、松本市・安曇野市の地域の大勢の皆様のお力添えがあったのであるが、特に、多大なご尽力を頂いた方々をここに記載して、心より感謝申し上げたい。

安曇野市商工会、浅間温泉にそばの花を咲かせる会、竹淵農場、浅間温泉観光協会、浅間温泉町会連絡協議会、浅間温泉まちづくり協議会、浅間温泉ゆめ市、浅間温泉旅館協同組合、浅間温泉旅館協同組合婦人部、アトリエMOO、かまくら屋、山賊焼を考える会、松本ハイランド協定施設連絡協議会、JA松本ハイランド、中小企業家同友会浅間部会、本郷地区子ども会育成会、(有)本郷鶏肉、ホットプラザ浅間、浅間温泉梅の湯、浅間温泉栄の湯、浅間温泉玉ノ湯、巾上町会、齊藤農園、双葉、一休庵、コネコネハウス、阿留雅、(有)有明、信州安曇野勸農、(株)JTB中部、ツーリストツアー（敬称略・順不同）他。尚、個人情報保護法の関係で個人名の記載は取りやめとした。

5. 2年目の支援活動から見えてくる状況

(1) 被災地の現状

2013年3月11日は大震災から丸2年が経過した日である。県内で継続的に支援活動を行っているところはめずらしいということでNHK長野放送局が大々的に松本大学の取組を取材し、この時期にあわせて放送した（ONAIRは2013年3月8日）。一般的には関心が薄れている中で継続的に行う意味を県内の視聴者に伝えたいというのが取材の趣旨であった。テレビなどでは「被災地の今」というタイトルで、その時々様子を断片的に目にはできるが、「被災地のある地点（定点）」をずっと追っていくことはそう簡単に目にはできない。定点に関わって得る関係性は、時間を共有すればするほど増すもので、児童と学生、先生方と学生といった具合にその関係のあり方も重層的になりつつあることを実感する。

大街道小学校がある石巻市大街道地区は、海側の位置に日本製紙という大きな製紙工場があり、大震災の時はその工場が防波堤となり直接的な津波を免れた地域である。その結果、家の形は残ったものの、建物はいたみ、2階まで海水に浸かり、ぐちゃぐちゃな状態でものが残った。使える家にするまでには多くの時間と労力が必要であった。従って、一時は地区そのものが、人がいないゴーストタウン化していた時期もあった。何のためにこの地区に入りボランティアで片付けをしたのだろうと正直思った時もあった。

徐々に家の灯りは増えつつあり、また地区に住民が戻りつつある。行政的には復興計画に基づいた動向が大切かもしれないが、住民は待ってられないのか、その時には二度手間になってもよいという覚悟からの動きが見られる。1階が使えない家は2階で生活をしている。何もなくなった庭に花を植えだしている。

当然、このような地区の動きや各家庭の動きの中に大街道小学校の児童がいる。その児童と学習支援を通して直接に関わり合いが持てることは大変貴重だと思う。反面、様々な困難を抱えている

かもしれない。私共にとってはそのような背景も含め、そこからまた立ち上がっていかうとする人の意気込みが感じられるところに直接に関与させてもらっていることは重要な意味があると活動を共にする学生と共有する昨今である。

(2) 支援体制

活動をはじめて2年目となるこの1年は、①学習支援活動②児童、親、先生対象のカウンセリング活動③サマーキャンプ実施を中心に支援してきた。財政的には復興庁の財源を活用して基本的な資金は確保した。サマーキャンプの資金は財団法人JKAの補助金を活用した。しかし、時間の経過とともに支援活動に対する補助金を取りやめている団体も多く、活動資金の確保は難しくなってきた。

学生派遣の調整は、プロジェクトが中心となり学内に呼びかけて学内教職員のご協力を得ながら行うことができた。特に直接的な窓口となる学生課の力は大きい。学生派遣に伴う引率者も学内教職員から申し出があるなどあまり困難なく手配できた。教職課程を専攻している学生が単位取得の認定、教職科目の公欠扱い等の処置もあり活動に参加しやすいことから比較的多くの学生の参加があった。また、女子ソフトボール部に所属するほぼ全員の学生が4回に分けて学習支援活動に参加した。

4月と8月に学習支援活動の説明会を開いて、関心のある学生がその後の実際の活動に参加する流れを組み合わせながら支援体制を整えている。大体、週後半の木～金曜日に現地へ赴くので、週初めの月曜日に直前オリエンテーションを経て参加するようになっている。3年目になる次年度も継続して取り組んでいく計画であるが、このような流れで引き続き行う予定である。

学習支援活動について、「児童との触れ合いが少ない」との意見が多くあった。学校の行事に参加するなどもっと関わる時間を多く持たないか学校側に申し出たところ、新年度の活動の中で検討していくことになった。

(3) 変わりつつある被災地との係わり方

「支援活動」と表現しているものの実態とはそぐわない感じがする。どちらが勉強になっているかわからない状況である。松本大学と大街道小学校との同じ教育機関同士との「互援（ご縁）活動」化している。継続して取り組むことの重要性を学ばせてもらっている。

この1年間の学習支援活動で見えてきた変化を次ぎにあげて、終わりとしたい。

- ①年度当初の頃は、学習会場に来て何かをするまで時間がかかっていたが、後半になり、すぐに学習に取りかかるようになった。
- ②児童から学生への質問が多くなった。学習内容についてはもちろんのこと、サッカーやプールのことなど学習支援と直接関係のない普通の話も多くなった。
- ③大街道小学校の先生方の挨拶が変わった。校長先生、教頭先生といった一部の学校関係者としか接点がなかったせいか、大半の先生方の活動への理解は乏しかったと思う。
- ④一時仮設住宅にいた児童が、元の家に戻ってきたという声を聞く機会が増えた。従って、「バスの時間は関係ない」児童が増えた。今後、学習活動の時間組みに反映できる要素になる。
- ⑤児童が外で遊びたがるようになった。「外で遊ぼう！」という要求が増えたように感じる。

資料

(1) 平成24年度活動報告

前期

	日程			参加人数					活動内容	学習支援 参加児童数(学年別2日間延べ数)							責任者		
	出発日～到着日			教員	専門 家	職員	学生	計		1	2	3	4	5	6	計			
	日	月	年																
1	4/12	木	4/13	金	1	1		2	4	・新年度最初のカウンセリング活動 ・「絆の木」、メッセージボードづくり (松本大学と大街道小学校(児童約100名)との共同作業) ・5月から開始する学習支援の打合せ(佐藤校長) ・5月から開始する学習支援活動のためのアパート(宿泊所)準備 (ガス・電気・水道の契約、生活用品の購入)									
2	5/10		5/12	土	1	1	1	5	8	・カウンセリング ・学習支援(1～3年と4～6年と教室を分けて宿題を見る)・被災地視察	9	15	21	27	20	16	108	木村晴壽	
3	5/24	木	5/26	土	1			5	6	・学習支援 ・被災地視察	9	17	16	29	24	27	122	尻無浜博幸	
4	6/7	木	6/9	土		1		5	6	・カウンセリング ・学習支援(宿題対応)	11	16	19	23	22	23	114	古林康江	
5	6/21	木	6/22	土		1		6	7	・カウンセリング・学習支援(1～3年漢字練習、筆算、かな練習)(4～6年漢字練習、分数、作文)	10	16	18	28	24	24	120	佐藤哲朗	
6	6/28	木	6/30	土	1			6	7	・学習支援 ・被災地視察 ・サマーキャンプ打合せ	8	11	13	23	19	21	95	白戸洋	
7	7/5	木	7/7	土	1			5	6	・学習支援 ・被災地視察 ・サマーキャンプ打合せ	10	16	13	16	0	19	74	尻無浜博幸	
8	7/12	木	7/14	土		1		6	7	・カウンセリング ・学習支援	10	14	17	28	16	25	110	古林康江	
9	8/6	日	8/9	木	1		1	9	11	・体験学習支援	0	0	19	20	16	31	86	尻無浜博幸 小穴悦子	
10	9/6	木	9/8	土	1			6	7	・学習支援 ・被災地視察	6	10	24	24	14	18	96	尻無浜博幸	
11	9/13	木	9/15	土		1		6	7	・カウンセリング ・学習支援	10	16	17	18	14	18	93	古林康江	
12	9/20	木	9/22	土			1	4	5	・学習支援 ・被災地視察	11	19	24	15	14	12	95	松田千壽子	
参加者延べ人数					6	5	3	65	77		94	150	201	##	183	234	1113		

後期

	日程				参加人数					活動内容	学習支援 参加児童数(学年別2日間延べ数)							責任者
	出発日～到着日				教員	専門 家	職員	学生	計		1	2	3	4	5	6	計	
	13	14	15	16														
	10/4	木	10/6	土	1			5	6	・学習支援 ・大学祭にて販売する被災地名産品の手配・被災地視察	14	18	20	23	9	15	99	尻無浜博幸
	10/11	木	10/13	土		1		4	5	・カウンセリング ・学習支援	11	17	18	20	6	16	88	古林康江
	10/25	木	10/27	土			1	7	8	・学習支援 ・被災地視察	11	18	22	16	4	15	86	宮坂佳典
	11/1	木	11/3	土	1			6	7	・学習支援(11/2のみ) ・パトロール同行(11/1) ・被災地視察	7	10	9	10	9	7	52	尻無浜博幸
	11/8	木	11/10	土		1			1	・カウンセリング							0	古林康江
	11/15	木	11/17	土	1			6	7	・学習支援 ・被災地視察	14	14	17	17	8	15	85	木村晴壽
	11/29	木	12/1	土	1			4	5	・学習支援 ・被災地視察	11	14	21	17	11	13	87	木村晴壽
	12/6	木	12/8	土		1		7	8	・学習支援 ・被災地視察	13	8	19	13	1	4	58	田中雅俊
	12/13	木	12/15	土	1			7	8	・カウンセリング ・学習支援 ・被災地視察	7	9	14	8	1	9	48	古林康江
	1/10	木	1/12	土		1		7	8	・カウンセリング ・学習支援 ・被災地視察	11	15	19	13	3	8	69	古林康江
	1/24	木	1/26	土	1			7	8	・学習支援 ・被災地視察	14	19	22	10	3	14	82	木村晴壽
	2/14	木	2/16	土			1	7	8	・学習支援(15日のみ) ・被災地視察 ・集団下校の引率支援(14日)	10	8	8	0	0	7	33	白澤聖樹
	2/21	木	2/22	金	1	1		7	9	・カウンセリング・学習支援 ・被災地視察・来年度の支援打合せ	11	15	14	14	12	10	76	古林康江 木村晴壽
	2/28	木	3/1	金	1			8	9	・学習支援 ・被災地視察 ・来年度の支援打合せ	8	10	11	8	9	12	58	尻無浜博幸
	3/14	木	3/15	金		1			1	カウンセリング							0	古林康江
後期計					8	6	2	82	98		142	175	214	##	76	145	921	
参加者延べ人数					14	11	5	147	175		236	325	415	##	259	379	2034	

(2) 平成24年度会計報告

収入の部		支出の部	
前年度より繰越	1,165,815	*カウンセリングと学習支援(文科省補助金対象外支出分)	
1. 外部からの援助		旅費・交通費 4月活動分、駐車料金他	154,040
ラブ イズ アロハ チャリティー	153,836	食糧費 石巻における食事代	708,111
台湾福祉施設	218,000	福利厚生 石巻における入浴料他	38,450
	371,836	消耗品 日用品(石巻アパート用)、ガソリン代他	157,674
2. その他 個人の寄付	53,500	会議費	674
		雑費 振込手数料	840
* サマーキャンプ		* サマーキャンプ	
1. 松本大学関係団体寄付・関係者募金		旅費・交通費 交通費 送迎 バス3台分 2泊3日	1,248,000
教職員・学生	35,000	交通費 松本市内移動 3台分	97,646
松本大学	97,646	その他 タクシー代、駐車料金代	2,830
	132,646	宿泊費 (124名)	1,493,040
2. 外部からの援助			2,841,516
団体	268,000	食糧費 昼食代 3回分	141,857
企業	18,900	飲料水 3日分	41,776
	286,900	送迎担当者食事代	30,171
3. 補助金(注1)			213,804
財団法人 JKA	2,995,000	通信費 案内、しおり等送付他	18,490
4. その他 大街道小学校昼食代	89,000	消耗品 ネームプレート、文房具、救急セット他	253,249
		バス内のクイズ等の景品	4,366
		A・B・Cコース 消耗品	37,607
		ミニ緑日用 かき氷、射的、花火等	36,605
			331,827
		賃借料 会場使用料、五徳、ガス資料料他	21,500
		専門職謝礼 2名分 9,000円×3日×2名	54,000
		雑費 振込手数料など	3,780
		保険料 ボランティア保険 (60名)	47,520
		参加者旅行保険 (102名)	59,364
			106,884
		* その他	
		返還金 JKAへの返還金	
		平成23年度捕縄事業に係わる返還金	140,217
			140,217
		来年度繰越	302,890
平成24年度収入合計	5,094,697	平成24年度支出合計	5,094,697

注1：公益財団法人JKAの補助金によりサマーキャンプを実施することができたことを感謝を込めてここに記す。

(3) 新聞掲載一覧

掲載日	掲載紙	タイトル	対象	氏名 1	学科	学年	氏名 2	学科	学年	氏名 3	学科	学年
1	2012/4/20 (金)	信濃毎日	松本大学生が「学習支援」石巻の小学校拠点にボランティア	教員・学生	尻無浜 博幸		岡村 寿秀	T	3			
2	2012/4/25 (木)	信濃毎日	宮城・石巻の小学校で学習支援	学生	由上 綾華	S 1	滝沢 勇気	S	1			
3	2012/4/26 (木)	中日	松本大 2年目の誓い 震災支援プロジェクト 学習支援	教員・学生	尻無浜 博幸		岡村 寿秀	T	3			
4	2012/4/27 (金)	中日	松本大 2年目の誓い 震災支援プロジェクト 心のケア	教員・学生	中山 文子		古林 康江			遠藤 舞香	T	3
5	2012/5/11 (金)	信濃毎日	松本大生、石巻で支援開始 被災児童に寄り添い宿題指導	学生	壇原 美咲	S 1						
6	2012/5/11 (金)	中日	被災地小学校に大学生先生 松本大が石巻に拠点	学生	石垣 実紀	S 1						
7	2012/5/28 (月)	中日	時のひと 被災児童の学習後押し	教員	尻無浜 博幸							
8	2012/6/9 (土)	石巻かほく	松本大、勉強お手伝い 定期的に大街道小訪問	教員・学生	古林 康江		木村 春壽					
9	2012/7/21 (土)	信濃毎日	石巻の児童招いてキャンプ 松本大生有志昨年に続き	学生	岡村 寿秀	T 3						
10	2012/8/8 (木)	市民タイムス	石巻の児童 信州の夏満喫 松本大被災地支援で85人招待	学生								
11	2012/8/9 (木)	信濃毎日	被災児童の笑顔 力もらった 支援キャンプ運営 3年の遠藤さん	学生	遠藤 舞香	T 3						
12	2012/8/9 (木)	中日	石巻の児童招きミニ縁日 松本大生昨年に続いて企画	学生								
13	2012/8/23 (木)	タウン情報	被災地児童らとキャンプ 松本大と石巻の大街道小が体験交流	教員・学生	尻無浜 博幸							
14	2012/9/18 (火)	信濃毎日	復興支援各地から 県内7大学で合同募金へ	学生								
15	2012/10/14 (日)	信濃毎日	復興願う「石巻焼きそば」松本大生、ことしも学祭に被災地グルメ	学生	岡村 寿秀	T 3						
16	2012/10/21 (日)	信濃毎日	石巻焼きそば大学祭で模擬店 松本大生復興願い販売	教員・学生	尻無浜 博幸		岡村 寿秀	T	3	鎌倉 奈美	T	2
17	2012/11/9 (金)	読売	放射線影響に高い関心 医療ルネサンス松本フォーラム	学生	枝 美沙希	S 2						
18	2012/12/7 (金)	信濃毎日	松本大、石巻の児童にアンケート 震災PTSD可能性5%	教員	古林 康江							
19	2013/2/8 (金)	日本経済	古本集めて寄付金に 被災地支援などに活用									
20	2013/2/14 (木)	日本経済	松本大、古本募金で被災地支援									
21	2013/3/8 (金)	市民タイムス	石巻の子供 笑顔で勉強 松本大・学習支援1年	教員・学生	尻無浜 博幸		岡村 寿秀	T	3			
22	2013/3/11 (月)	信濃毎日	絆は消えない 親子の心をケアし続け	教員	古林 康江							
23	2013/3/22 (金)	信濃毎日	松本大 石巻支援を継続 震災3年目小学校の要望受け	学生	岡村 寿秀	T 3	遠藤 舞香	T	3			

T：観光ホスピタリティ学科 S：スポーツ健康学科